

ピア・フィードバックによる 学習者エンゲージメントを高める実践

ー 全員参加の授業を目指して ー

学籍番号 249313

氏 名 尾角 麗実

主指導教員 加賀田 哲也

副指導教員 王 林鋒

1. 研究背景

学校現場では、「主体的・対話的で深い学び」をキーワードに授業改善が進められている。しかし実際には、学習内容に興味・関心が持てない、自己との関連付けができない、あるいはすぐに諦めてしまうといった理由で主体的に学べていない子どもも多く存在する(平山2020)。

こうした現状は、実習校でも同様である。本校は大学附属の国立中学校で、生徒全員が選抜を経て入学していることもあり、テストや成績に対する意識が非常に強いことが特徴である。また、各教科の提出物が多く、通塾率も比較的高いことから、生徒の学習面での負担は大きい。その結果、意欲を伴わない、義務的で効率重視の学習になっているように見受けられる。

英語教育においては、現在、生徒自身が学ぶ意味と自分の生活や社会とを主体的に結び付け、積極的に言語活動に取り組み、学んだことを活用しながらコミュニケーションの資質・能力を身に付けていくことが求められている(文科省, 2019)。そのため本校においても、生徒が学ぶこと自体に興味を持ち、夢中になって取り組めるような授業を展開することで、一人ひとりの主体性を高め、義務的な学びからの脱却を図ることが必要であると考えた。

本研究では、「学習者が活動に積極的に参加・関与し、夢中になって取り組んでいる状態」(Mercer & Dörnyei, 2020 鈴木・和田訳 2022)を指す「学習者エンゲージメント」という概念に着目し、生徒が主体的に取り組めるような学習活動を検討する。

2. 実践課題研究 I

実践課題研究 I では、各教科等の観察と質問紙調査を行い、実習校の課題を明確化した。

まず、1学期は教員の振る舞いに注目した観察を行い、エンゲージメントの土台となる心理的安全性を高めるような言動をどの程度行っているのかを分析した。その結果、観察を行った全教員に、生徒の心理的安全性を高めるような、親しみやすい存在としての振る舞いがみられた。

2学期は、エンゲージメントのもう一つの土台となる「促進的マインドセット(自分ならできるという前向きな捉え方)」と、生徒の積極的な参加を阻害し得る学習不安に対して、授業者がどのような工夫をしているかに注目した。結果として、観察を行った英語科の教員には、生徒に自己決定させる機会を与え、自分事として取り組めるようにする工夫や、学びのユニバーサルデザインの視点から、誰もが安心して学びやすい授業環境を整える工夫などがみられた。

さらに、2学期末には質問紙調査を実施し、生徒の心理的安全性とエンゲージメントの程度、また不安を感じる場面について実態を把握した。その結果、心理的安全性は概ね保たれていること、不安の感じ方には個人差があることが示された。またエンゲージメントについては、行動的エンゲージメントに比べて感情的・認知的エンゲージメントが低いことが明らかになった。

これらの結果を、実習校指導教員の助言や筆者(授業者)の見取りと併せて考えると、実習校の生徒は、テストや成績のために活動に取り組みはするものの、学習そのものへの楽しさや興味はあまり感じておらず、工夫して相手に伝えようとする意識も高くないと推察された。

3. 実践課題研究Ⅱ

実践課題研究Ⅱでは、生徒の認知的・感情的エンゲージメントを高めることをねらいとして、英語のライティングとそれに対するピア・フィードバックを実施し、その有用性を検討した。

ピア・フィードバックとは、「作文の推敲のために学習者同士がお互いの書いたものを書き手と読み手の立場を交替しながら検討する活動」(池田, 2022)である。ピア・フィードバックには一長一短があるが、ライティング活動に取り入れることで、互いの考えを認め合う喜びや相手意識が醸成され、延いては感情的・認知的エンゲージメントが促進されることが考えられる。

本実践ではICT端末を活用し、(1)15分間のライティング、(2)4人班でのピア・フィードバック、(3)フィードバックを踏まえたライティングの流れで、計5つのテーマに取り組んだ。

1学期の実践では、ライティングの「内容」については生徒同士で、「文法・構成」については筆者(授業者)からフィードバックを行った。質問紙調査および半構造化インタビュー調査を通して実践の効果を検証した結果、感情的・認知的エンゲージメントについては全ての項目で肯定的回答数が増加した。また、生徒からも「友達が共感してくれて嬉しい」「相手が知っていいような表現を使うようにしている」と前向きな声が聞かれた。一方、行動的エンゲージメントについては、調査の結果、予期せぬ低下がみられたことに加え、自動翻訳を安易に使用する生徒の存在や、授業者が生徒全員にコメントを返す負担の大きさも課題として明らかになった。

2学期の実践では、教師フィードバックの代わりとして生成AIによるフィードバックを取り入れた。実践①後と結果を比較すると、エンゲージメントは全ての項目で肯定的回答が低下した。質問紙調査やインタビュー調査の回答を踏まえると、生成AIによる過度に正確性を重視した一方的なコメントが生徒の否定的な感情を生み、エンゲージメントを阻害する要因になり得たと考えられる。しかし、2学期から英語科の授業数が増え、生徒らと新任教員との関わりが生まれるなど環境の変化もあったため、本実践以外の影響を受けている可能性は否定できない。

4. まとめと今後の課題

本研究を通して、ライティングの「内容」に対するピア・フィードバックには、生徒の感情のおよび認知的エンゲージメントを高める可能性があることが示唆された。一方生成AIによるフィードバックは、その活用方法によっては、エンゲージメントを阻害する要因になり得ることが確認された。本実践では、エンゲージメントの飛躍的な向上には至らなかったが、意欲を伴わない義務的な学びから脱却するための手がかりを掴むことができた。今後は、ピア・フィードバックのように支持的なフィードバックの機会を確保することに加え、魅力的なタスク設計や生成AIの適切な活用方法を検討することで、生徒がさらに夢中になれる授業の実現に近づくことができると考えられる。